

## 定置網漁業を基盤とした複合経営の実践 —自立した漁業者への道—

漁業協同組合 JF しまね  
小島 貴志

### 1. 地域の概要

私の住む多伎町は、出雲市の西端に位置し、農業や水産業などの第一次産業を主体とする人口約 4,000 人、面積 55 km<sup>2</sup>の小さな町である(図 1)。海岸部は高い生産力を持つ大社湾という広大な砂浜域からなり、その反対側は国道と集落をはさんですぐ山が迫っている自然豊かな地域である。



図 1. 地域の概要

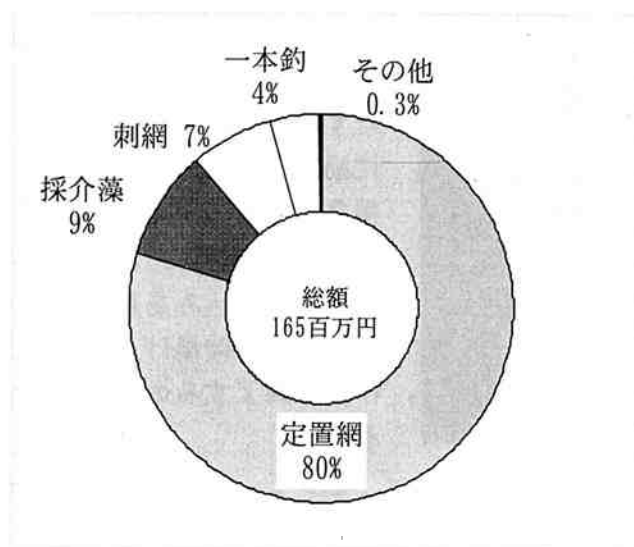


図 2. 多伎の漁業種別漁獲金額 (H17)

### 2. 漁業の概要

私の所属している JF しまね 大社支所多伎出張所は、56 名の正組合員が在籍し、平成 17 年の水揚げは 1 億 6,500 万円であった(図 2)。まき網や底曳網といった大規模な漁業はなく、定置網を中心に沿岸部を漁場とした採介藻、刺網、一本釣などの小型漁船漁業が営まれている。

### 3. 研究・実践活動取組課題選定の動機

私の実家では、父が鮮魚店を経営しながら、兼業で沿岸漁業を営んでいた。私は 2 つ年下の

弟と小学生の時から父の手伝いとして一本釣に携わり漁の面白さを実感していた。そのため、兄弟そろって腕一本で生計を立てられる漁業者になりたいといつしか思うようになっていた。

しかし、私が高校を卒業する以前の多伎の漁業は、採介藻や刺網などの零細な漁船漁業が主体であった。このような漁業種を生業としてやっていくためには、経験や熟練した技術を要し、着業してもすぐに生計を立てられることは難しい。そのため、現実的には、家業である鮮魚店を継ぎ、兼業で父の操業を手伝うことで漁業に関わっていくことも考えていた。

そんな中、私が高校3年生の初めの頃、地元の小型定置網2ヶ統が大型定置網1ヶ統に再編されるという話を聞いた。この大型定置網は第三セクター方式の会社組織で運営され、乗組員の収入は歩合制から定額の給料制になるという。漁業の仕事をしながら安定した給料をもらえることが非常に魅力的に感じられ、これまでの迷いが払拭された。父を通じた漁業関係者からの勧めもあり、私は高校卒業後にこの会社に入ることを決心した。

#### 4. 研究・実践活動状況及び成果（または効果）

漁業者として、まず最初に、会社の方針により入社した年の8月から2年7ヶ月間、石川県の漁網会社で定置網研修を受けることになった。この研修では、全国各地のありとあらゆる定置網の構造と操業方法を学んだ。それまで、多伎で研修を受けた人はおらず、大変貴重な体験であった。私は、研修をやり抜いたことにより、乗組員としてやっていけると自信をつけることができた。そして、研修が終了すると、多伎における私の本格的な漁業者としての生活が始まったのであった。この時、弟はすでに高

校を卒業して乗組員になっており、以後共に歩むことになった。

私はまず、給料をもらう会社員として一人前の役割を果たすことを第一に考え、操業に励んだ（写真1）。定置網の操業は、日の出1時間前から始まり、網揚げ、漁獲物の魚槽への取り込みを経て、帰港してからの陸揚げ、荷さばき作業が終了するのは昼前である。

そして、このような作業を毎日続けながら感心したのが、



写真1. 定置網の操業の様子

先輩乗組員の自立意識の高さであった。ほとんどの人は、定置網の仕事をきちんとこなしたうえで、さらに兼業として何らかの漁船漁業に取り組み、相当な漁獲実績をあげているのである。

私は、元々負けず嫌いな性格であったため、彼らに追い付け、追い越せという気持ちになり、定置網の作業が終了した後の、午後からの時間を利用して父の元で弟と共に採介藻や刺網に取り組み始めた。そして、自分の船を持った自立した漁業者を目指

し、20代で兄弟共同の漁船を購入するという具体的な目標を立てた。このことを常に意識することで、私は生活のすべてを漁業に懸けることができたのである。

あらためてベテラン漁業者である父と共に漁に励むことにより、私たち兄弟は多くのことを吸収できた。その中で、特に勉強になったのが、日ごとの漁業種、ねらう魚、漁場の選択である。天候や前日までの漁模様、魚の回遊状況、ほかの漁業者の操業状況、市況といった情報を判断材料に、毎日の操業計画を共に考え、実践してきたことは何にも変えられない経験であった(図3)。

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	対象魚
定置網	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	マアジ、ハマチ、サワラ
採介藻 (かなぎ漁)													サザエ、アワビ、ナマコ
採介藻 (ウニ獲り)													ウニ
刺網	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	ワカナ、ハマチ、サワラ
サワラ釣													サワラ
タイ・アジ釣													マダイ・マアジ
サザエ網													サザエ

■ : 操業期間

その後、自分たちの判断で操業する自信も出てきたため、私が26歳になった時に兄弟共同の漁船を購入して父から独立することにした。私たちにとっては、非常に大きな決断であったが、父が後押ししてくれたことは大変心強かった。

こうして、漁業者生活の第二段階をスタートさせた私たちであったが、最初の半年間は思うような漁ができなかった。特に、刺網ではまったく魚が掛からず、自分の判断で操業する難しさ

をかみしめた。それでも、とにかく海に多く出ることを心がけ、あらゆる場所で網を打ち、漁場のデータを積み重ねた。そんな毎日が続くうちに網を打つポイントなどが分かり始め、少しずつ漁獲も増加するようになっていった(図4、5)。

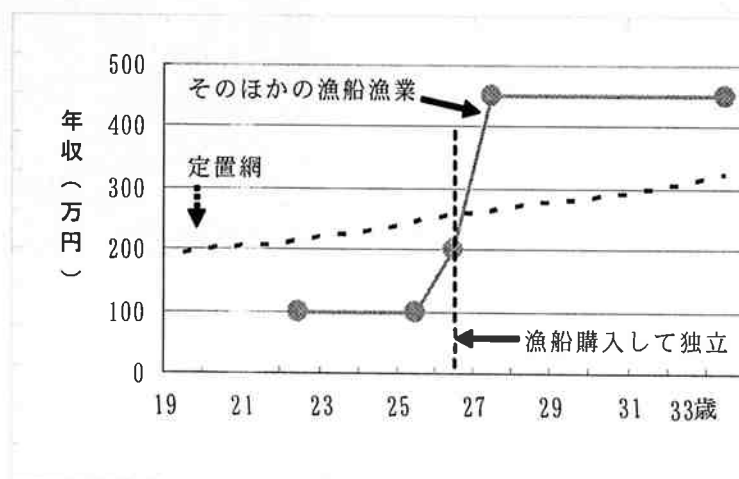


図4. 水揚げ年収の推移

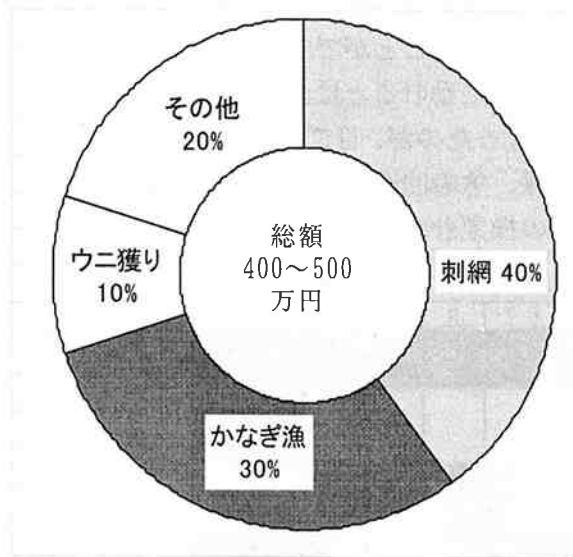


図5. 近年の漁船漁業の漁業種別収入の割合

一方で、自分の船を購入し、一人前の水揚げ実績が残せるようになったのは、弟と共に実践できたことが大きい。例えば、刺網の操業においては、私たちの船は、1人操業の船よりも段違いに揚網時間が短い。特にハマチのような回遊魚をねらう場合は、素早い作業により投網回数を稼ぐことが大事である。また、1人ではどうも揚網できない大きな群れをねらうことも可能となる。それだけではなく、揚網時間が短いと、漁獲物を早く氷で保つことができるため、鮮度向上を図りやすい。精神面では、漁に出ることに対して強い

責任感を持つことにつながっている。1人だけの操業なら体力的にきつい時は休んでしまいそうだが、相方がいて「今日も漁に出るぞ」と言われたらなまけていられないからである。

また、私が海で存分に漁に励むことができるのは、妻や両親の協力があることも大きい。夜間の刺網の操業において、大きな群れに当たった時には（写真2）、帰港時間が定置網の操業開始ギリギリであることが多い。このような時は、船を港につけると、すぐに定置網に駆けつける。船に残された膨大な漁獲物の箱詰めは妻にやってもらう。年に数回しかないような大きな群れがきた時には、父を含めた3人掛かりで操業し、箱詰めは母と妻が行う。そのほか、妻はウニの瓶詰め作りを行い、私の獲ってきたウニの付加価値向上に一役買っている。



写真2. 大漁であった刺網の操業

さらに、定置網の作業が自分の操業にもたらす効果も大きい。毎日の網揚げ作業は、回遊してくる魚の状況など漁場環境を把握することに非常に役立ち、乗組員との会話により、ほかの漁業や浜全体の様子も知ることのできるものである。

## 5. 波及効果

このように、定置網の乗組員として奮闘しながら、それ以外の漁業でも思考錯誤し

てきた。その姿が同じようにならばる地区内の漁師仲間の目にとまり、お互いの技術や経験を補い合うことにより浜全体の漁獲量を少しでも伸ばせるのではないかと考え、一本釣同好会を結成した。活動内容は、漁場、仕掛けなどの情報交換が中心である。沖で操業している時には、漁業無線を使い、仲間内で決めた暗号で操業場所や仕掛けなどを教え合っている。それだけではなく、帰港した後にも、その日使った仕掛け、釣果を見せ合うなど次の操業の参考になるようこまかい部分までお互いの情報を交換しているのである。特にサワラ釣は隣の地区と操業エリアが重なるため、私たちが漁獲を伸ばすためには仲間の協力が不可欠なのである。そのほか、釣に関する話題以外にも、海の状況全般についての情報交換により、ほかの漁業の操業にも役立っている。私が定置網漁業のほかに多くの漁業に取り組むことができるのは、このような漁業者同士の協力が非常に大きいと感じている。

また、私のような若い漁業者ががんばっているのが話題になったのか、平成 18 年 4 月に地元の高校を卒業した者が定置網の従業員として入ってきた。今までは、私たち兄弟が多伎の漁業者で一番若かったが、後輩ができて大変うれしく思っている。多伎の漁業者として定着できるように私の経験を伝えていきたい。

## 6. 今後の課題や計画と問題点

本格的な漁師生活を始めて 15 年が経過し、漁業収入によって自分の家族を養っていけるようになった。しかし、一方で水揚げの限界を実感している。船の規模、使える網の大きさ、操業時間、体力をフルに活用してやってきたが、出漁日数はここ数年変わらない。自分だけで獲る漁では収入は頭打ちである。そこで、10 年、20 年先を見据えて、新たなことを始めなければと実感している。

そして、そのひとつとして獲った魚に付加価値を付けて高く売ることを検討している。定置網では、近年、殺菌冷却海水供給装置を活用した漁獲物の高鮮度処理に取り組み、「多伎の定置ものは鮮度がよい」と評判になっている（写真 3）。平成 18 年 1 月に漁協が合併されると市場の制度が緩和され、多伎の漁獲物を求めて仲買業者が 4 社から 13 社に増加し、魚価が向上している。



写真 3. 定置網のブランドラベル

漁獲物をきちんと扱うことが魚を高く売ることにつながることを実感したため、刺網や、一本釣りでも氷や箱詰め方法を工夫して付加価値向上に努めていきたい。このような課題に、今までと同様に家族や浜の仲間と協力しながら、地域全体で取り組んでいきたいと考えている。

私は父が漁業者だったため、着業前から浜の情報が自然と耳に入り、将来の漁業者

生活がどんなものになるかだいたい想像できた。しかし、U・Iターン者や身内に漁業者がいない人は、操業のようすや収入面をはじめとした漁業者生活に関する情報を手に入れることが難しく、将来の予測がつきにくいと思われる。私の実践してきた定置網漁業を基盤とした複合経営は経験や技術がなくても、安定した収入を得ながら情報収集や漁業技術の向上が図れるのではないか。そのため、これをひとつの経営モデルとして新規就業の参考にしていただければ幸いである。